

読解と解説

市河寛齋の詠んだ富山
(一)

磯部 祐子

富山大学人文科学研究第79号抜刷
2023年8月

市河寛齋の詠んだ富山 (一)

磯部 祐子

一、はじめに

富山の藩校「広徳館」は、第六代藩主前田利興によって、安永二年（一七七三）に設立された。それから十八年後の寛政三年、「広徳館」では、それまでの漢学の系統である徂徠学派が幕命で異学として退けられたため、官学である朱子学へ転換することが余儀なくされた。その時招聘されたのが、朱子学を学びつつも、他を異学として退けることに異を唱えた昌平齋の学頭、市河寛齋であった。

昌平齋の職を辞したのち、寛齋は家族を養うために富山藩に出仕したことから越中に足を踏み入れることとなり、異郷の地において、多くの詩を詠んだ。では、果たして、その作品で、越中ほどのように描かれているか。寛齋の詩にその土地の風物は何をもたらしたか。小論は、主に、その著『寛齋先生遺藁』に収められた富山にまつわる漢詩を、四季、富山各地の風景、その文化、富山で交わった人々、という視点から読み解こうと思う。それらの詩からは二百数十年前の富山の風景や生活が浮かび上がるとともに、江戸という大都市から地方へ来た一人の儒者の内面のあり様も垣間見ることができるともいえるかもしれない。同時に、寛齋が如何に多くの中国の詩を理解し我がものにしていくかとも知ることができよう。

二、寛齋という人

市河寛齋は、一七四九（寛延二）年に、川越藩江戸屋敷で山瀬（市河）好謙の子として生まれ、一八二〇（文政三）年に没した¹⁾。名は、初めは真則、後に好澂、世寧とも称した。字は子静、嘉祥。号は寛齋、西野、半江、玄味子、蕉竹園、木石居、江湖詩老、甌老²⁾など多種ある。余談ではあるが、幕末の三筆の一人である市河米庵は長子、画家の鏑木雲潭は次男である。寛齋は二八歳の時、林家の門をくぐるが、一七九〇（寛政二）年に、朱子学以前の儒学を退けなかったことから、昌平黌を退職せざるを得なくなった。その後、冒頭でもふれたように、富山藩主に登用され、一七九一（寛政三）年から一八一（文化八）年まで二十年間、富山藩藩校広徳館の儒官長の任を得、また掛川藩世子の侍講を兼ねた。

一方、昌平黌を退職する以前、一七八七（天明七）年に、神田で江湖詩社を開き、柏木如亭・菊池五山などに漢詩を指導し、富山藩に任じられている間も、詩社の活動は続けた。

自身の漢詩集としては、『寛齋先生遺藁』五卷、『寛齋摘草』四卷などがある。また、編著に、日本の奈良時代から平安時代末までの漢詩約三八百首を集めて作者別に編んだ詩集『日本詩紀』五十三巻がある。他には、『全唐詩逸』があるが、これは、康熙帝の勅撰漢詩集である『全唐詩』から遺漏した作品を集めて出版したもので、今日でもその成果は高く評価されている。

三、寛齋が富山に来た理由

前述のように、寛齋は、幕府儒官林大学頭家の家塾に起源をもつ昌平黌に学び、その学頭（啓事役）も務めたが、寛政の改革によつ

一 市河三陽『復刻市河寛齋先生』（あかぎ出版、平成四年）三七〇頁。
二 同『復刻市河寛齋先生』十七頁。

て辞任することになる。この間の事情については、漢詩人であり画家でもある僧侶雲室による随筆『雲室随筆』に詳しい。雲室は関松窓^三や市河寛齋などと親しかったことから、その逸話なども記している。『雲室随筆』^四には、寛齋が昌平齋に出仕したことを、

さて、市河小左衛門といへる人、名世寧、字子静、西野と號、自ら松牖の門人と桶町邊に居られしか、當世の詩人にありし。松牖此人を進めて吾と同じく學職とせられ聖堂へ引移られたり。

と記している。

聖堂の「学職（教学の職）」として湯島聖堂に職を得たのは、松窓の誘いがあればこそであった。やがて、学頭になるが、学頭とは、学校の職名で教員の上位に位置する。湯島聖堂（昌平齋）の学頭に任ぜられたのは、天明三年（一七八三）から七年までである。当時、松牖（窓）も学頭の一人であった。

その後、寛政の改革によって学問への締め付けが強くなる。寛齋は、寛政二年（一七九〇）異学の禁によりその職を辞すことになった。それは、田沼意次の失脚とも関係がある。意次が失脚し、意次と入魂の関係者も職を追われた。その関係者の一人が関松窓であり、松窓と寛齋の関係が深かったゆえに、寛齋も辞任を余儀なくされたのである。そのあたりの事情が、『雲室随筆』には次のように記されている。

松窓は田沼主殿正殿へ入魂に出入せし事疑敷相成、林家四世の學職被勤けるを廢し其上離門被致ける。小左衛門も學職を止られ、浅草邊へ引移らける。松窓は虎の御門外松平藤十郎殿地面へ引移住まれたり。兩學頭如此一度に廢せられし^五。

つまり、意次、松窓、小左衛門（寛齋）と芋づる式の失脚であった。なお、この記述の中で、松窓、寛齋両氏が「學職」、「學頭」であったと記され、他にも「學頭」として平澤五助、鈴木作右衛門等の名前が挙がっている。今でいえば、「學頭」は複数名置かれた「教授」、

三 関松窓（二七二七—一八〇二）は、寛延三年昌平齋に入り、のち上野前橋藩儒となった人物。

四 『統日本随筆大成第一卷』（吉川弘文館、昭和五四年）所収、僧侶雲室著『雲室随筆』七頁。本書は、当時出版されなかったが、雲室自身の経歴を、始めとし、交遊のあった学者・詩人・画家などの逸話・人物評を記したものとして史料的价值は高いとされる。

五 同書九頁。

「学科長」ということか。ちなみに学長に相当する役職は「祭酒」といい、湯島聖堂祭酒は、当初、私塾であったため、歴代、林家が担っていた。その後、元禄四年に三代林信篤が「大学頭（祭酒）」に任じられ、大学頭の官職も林家に世襲されて幕府の教育機関への道を拓くことになる。いわば、私塾の位置づけから、官立の昌平坂学問所、昌平饗へと変わるのである。

このような情勢の下で、松窓、寛齋らは昌平饗を追われた。仕事を失った寛齋は、家族を養うために職を探さなければならなくなつたのであろう。

その後、寛政三年、寛齋は、富山藩藩校広徳館の儒官長（学長）の職を得た。『雲室隨筆』に「後に松平出雲守殿臣吉村順左衛門推挙にて富山の文学となられたり」^六とあるように、その推挙斡旋は、富山藩士吉村順左衛門によるが、その吉村に宛てた（三月二十三日付）尺牘の中にも、

昌平辞職の後、窮巷に屏居し、家累百指食を一個の舌頭に仰ぐ。東奔西走、日給するに暇あらず、之に加ふるに、唱酬崇りをなし、債塵の如くにして掃へども又来る。…今大夫の徴に遭ひ覺えず慙汗背に盜る。^七

と、昌平饗を辞してからの困窮ぶりや詩歌のやりとりにも費用がかかること、それゆえ、この度の推挙がいかに有難いかなどが率直に記されている。また、四月二日付で山形にいる母に宛てた手紙に、加賀の分家松平出雲守方に、定府儒者格式馬廻り、二五人扶持、ほかに江戸扶持など一か月三十両加えて役金十両である等と、その好待遇について記している^八。

かくして、寛政三年の春、出仕を決めた寛齋は、七月六日に江戸を立ち^九、同月十六日に富山に到着した。富山藩儒官長の寛齋は、以後、江戸と富山を往復しながら、時勢に従って、すでに機能していた広徳館の学風を徂徠学派から朱子学派に改めたほか、学制の整備、教

六 同書十九頁。

七 前掲『復刻市河寛齋先生』一三九頁。

八 前掲『復刻市河寛齋先生』一三九頁。

九 『詩集日本漢詩（八）』（汲古書院、一九八五年）所収『寛齋先生遺藁』卷一（二七二頁）に「辛亥七月初六將赴越中早發都門、永日、克従、子願、立人、端人送至板橋驛、賦此為別」の詩がある。また、同詩集には、到着日と思われる十六日に詠んだ「十六夜同諸子遊蓮華寺陰雲不見月」（『寛齋先生遺藁』卷一、二七三頁）の七言絶句がある。

科書の出版などを行い、後進の育成に努めた。

なお、広徳館に招いた吉村順左衛門述彰^{一〇}は、かつて、広徳館の設立に当たって、藩主利與の命を受け、昌平饗の規模・機構・祭儀を調査した人物^二であり、江戸での寛齋の学識とその名声、及び当時の困窮ぶりを十分に理解していたと思われる。

四、寛齋の人物評価

寛齋の漢詩の世界をうかがう前に、寛齋に与えられたその評価を概観したい。そのうち、最も的確な評価は、『市河寛齋先生』所収の揖斐高氏による簡にして要を得た「序文」^三、および今関天彭氏の「市河寛齋」^三に見ることができる。

揖斐氏は、寛齋を『全唐詩逸』の編集からみる学者としての「顔」、『北里歌』所収の竹枝詞から読む詩人としての「顔」、詩社の立ち上げと俊才の輩出を通じて窺う教育者としての「顔」から高く評価する。小論も、その視点から評価を試みたい。

まず、寛齋個人について述べよう。中国の文学の精華は、「漢文唐詩宋詞元曲（中国の漢代の散文、唐代の詩、宋代の詞、元代の演劇）」と言われるが、その中でも、唐の詩は中国文学史上、極めて大きな位置を占めている。清の康熙四十五年（一七〇六）には、勅命で唐と五代の詩の全集である『全唐詩』が編まれた。全九百卷、二千二百余人の作、四万八千九百十余首が収録された、清国における一大編纂事業であった。しかし、全てを渉猟することは不可能であったと見え、それから百年を経て、海を隔てた日本において、寛齋が『全唐詩』から遺漏した唐詩をまとめて出版した。文化一年（一八〇四）に『全唐詩逸』として刊行したのがそれである。『全唐詩逸』には、日本に伝来された文献から『全唐詩』未収録の詩七十二首が補われた他、不完全ではあるが唐の詩と思われる句二百七十九が蒐補され

一〇 高瀬保編、近世文書を読む会解説『越中資料集成二』（桂書房、一九八七年）一〇二頁の「安永九年分限帳」に「八人扶持」とある。

一一 坂井誠一、高瀬保編著『富山県教育史』（思文閣出版、一九八五年）九二頁。

一二 『復刻市河寛齋先生』二、三頁。

一三 『復刻市河寛齋先生』三五三～三六三頁。今関天彭（一八八二～一九七〇）。

た。後に、清に逆輸入されて、士大夫らの用いる叢書『知不足齋叢書』にも収められることになる。遺漏した詩文を探し出すなどとは一朝一夕になるものではなく、多方面の漢籍を丹念に渉猟しなければならぬ。ましてや、異国においてこれだけの成果を上げるには、学者として相当な学識の蓄積が必要であった。ちなみに、二十世紀末（一九九二年）に、上海復旦大学の陳尚君氏が『全唐詩』未収録の詩を集めて『全唐詩補編』（中華書局）を出版した。陳尚君氏はこのような活動から、当代の中国文学研究者として極めて高く評価されている。このことから、百五十年前の、それも外国人による逸詩逸文を蒐めてその補充を行う作業が、漢学本場の学者からも如何に高い評価を受ける行為であるかが窺える。

二点目は、世俗の風習への理解と漢字への視点である。韻文形式の一つ、竹枝詞は、中国では、唐の時代にその土地の風俗を詠じたものであったが、明になると遊里のこともうたわれた。日本でも、江戸後期には、主に遊里の歌として詠まれるようになるが、それは寛齋から始まる。寛齋は、詩の格式はかくあらねばという考えは持たず、自らの真情に基づいて創作したものであれば、詠む対象が遊里であれ、社会を舞台にしたものであれ、いずれであってもかまわなかった。寛齋の詩社の一人でもあり、寛齋より一歳年上の海瑗、すなわち、海野螻齋（一七四八―一八三三）が寛齋の詩を収めた『寛齋百絶』寛政九年（一七九七）の序に、「寛齋先生は手を染めない詩はないようにみえる。初めは明の七子に思いを寄せ、やがてその陳腐さが嫌になり捨て去った。昌平鬻を辞職した後は、まず白樂天、ついで杜牧・李商隱、また宋代の詩人では楊万里から陸游と作品を渉猟し、自身の詩のスタイルは時や状況によって変わった。今日のスタイルは明日のスタイルに非ず。これが先生である。（寛齋先生於詩蓋無所不為矣。初刻意明七子、既而厭其陳腐、一旦棄去、昌平辭職之後、首崇白氏、傍及樊川義山、時又為宋、出楊入陸、其體應時而變、隨境而遷。今日非明日、明日非今日。此其先生也。）」とあり、みずからの興趣に応じて、さまざま詩の形式に関心を抱いていたことが窺える。それゆえ、「竹枝詞」という、いわば正当とはいえない韻文のスタイルをも避けることなく、『北里歌』を編むに至ったのである。

次に三点目である。前掲の『寛齋百絶』序に、「今、柏木如亭、小島大海、菅谷伯美、菊池五山、大窪詩仏らが加わり、堂々とした一門となった。このように、江湖詩社には素晴らしい人々が加わったことにより、盛んになった。（方近如永日克従伯美無絃天民諸子、儼然成一家、江湖詩社得人、於斯為盛。）とみえるが、ここからは、詩社の主催者として英俊を呼び寄せ指し導力があつたことが推測

できよう。また、寛齋は俊才育成を自らのミッションとして大切にしたいようであり、俊才の一人である菊池五山は、若い後輩を指導する寛齋を見て、「寛齋先生は詩社を主催したが、才能ある人々を使命のように愛した。（寛齋先生主持風雅、愛才如命）」^{一四}と記す。

五、寛齋の詩に対する評価

『北里歌』を制作したことから、詩作においては、スタイルに偏見のない融通無碍な寛齋であつたと述べたが、寛齋の死後、寛齋の詩について、どのような評価がなされたか。

今関天彭はその著『市河寛齋』において、寛齋の弟子菊池五山と比べて、「寛齋の詩は、實は平俗で風趣のないものである」という。また、「寛齋の詩は面白くないが」と記しつつも、「（寛齋摘草の詩は）余程手に入ったもの（手慣れたもの）」とも記す。また友野霞舟という、寛齋より四十歳以上も年下で昌平坂学問所教授の漢詩人は、「力弱く幅窄く、しかも纖佻」（今関其集、力弱而幅窄、時涉纖佻、殊不称其聲。）^{一五}と些か低い評価を下している。

しかし、現代の研究者の評価は決して低くはない。例えば、『日本漢詩人選集9市河寛齋』終章「市河寛齋について」^{一六}においては、「寛齋は何よりもまずすぐれた詩人であつた。」「そこ（竹枝歌）に彼の写実を重んじ格式に拘泥しない、創造的精神が看取される」「陸游詩における自然や人生に対する真摯な愛情、そして平易で飾らない表現手法（がある）」「家族の情愛や家庭生活を題材とする詩が多い」「平坦なうたいぶりのなかに奥行きを備える」「つとめて美辞麗句を去り、質朴な筆致で自らの躍動する個性を表現することによって、清新な境地を追求しようとする」と記される。「飾らず」「質朴」な表現スタイルと詩から読み取れる「人生や自然への真摯な愛情」こそが寛齋詩の特徴であるというのである。

一四 娛庵居士（菊池五山）著『五山堂詩話』（文化四年）卷二。

一五 『日本詩話叢書』（池田四郎次郎編、文会堂書店、大正九年）所収「錦天山房詩話下」一五四頁。

一六 蔡毅、西岡淳著、研文出版、二〇〇七年。

六、富山を詠んだ寛齋の詩

寛政三年に富山に出仕して致仕までの二十年間、寛齋は江戸と富山の五度の往復を重ねるが、富山で詠んだ詩は少なくない。寛齋の目に映った富山はどのように描かれたか。関連する漢詩をその背景を加味しながらテーマごとに読み解こう。富山の地方志や現地調査によって、詩の背景など新たな知見を加えることも意図するが、すでに詩の一部は、先述『日本漢詩人選集9 市河寛齋』および『江戸詩人選集第五卷 市河寛齋・大窪詩仏』^{一七}に収められているものもあるので、その場合は、注にその旨を明記する。

なお、用いる底本は、『詩集 日本漢詩 第八卷』所収の「文政四年 江戸浅草茅町二丁目 須原屋伊八」出版になる『寛齋先生遺藁』^{一八}である。

(1) 富山の四季を読む

寛齋が祭酒であった広徳館の校舎は、初め富山城三の丸の外堀の東、総曲輪にあり、文化七年（一八一〇）に、城内三の丸に移された。寛齋は文化八年（一八一二）に致仕するものの、それ以前享和三年（一八〇三）三月富山を離れていることから、勤務地は富山城三の丸の外堀の東に置かれていた総曲輪の藩校であり、居住地もそこから遠くないところであったと思われる。そこから、立山を眺め、富山の自然の中で生活した。

始めに、四季を詠んだ漢詩を春夏秋冬の順に見ていこう。漢詩においても、四季は、一つの詩題である。寛齋は、江戸から離れた北陸富山の地で、それをどのように感じどのように詠んだのだろうか。まず、美しい桃の姿を通して春の到来の喜びを窺おう。

一七 揖斐高著、岩波書店、一九九〇年。

一八 汲古書院、昭和六十年。

【春】

① 桃園置酒

富山城中水之東 富山城中 水の東
萬樹桃花燒春風 萬樹の桃花 春風に焼かる
爛熳何數玄都觀 爛熳 何ぞ數えん玄都觀
只疑天台古仙宮 只だ疑がう 天台の古仙宮かと
一時晴景不可失 一時の晴景 失するべからず
移席命酒名園中 席を移して酒を命ず 名園の中
清明前後日温暖 清明前後 日は温暖
映出煙霞深淺紅 映し出す 煙霞の深淺の紅
去歲江東賞花醉 去歲 江東にて花を賞でて酔い
今年海北興更同 今年 海北にて興は更び同じ
花自年々不改色 花は自ずと年々色を改めざるも
人已黑白半頭翁 人は已に黑白頭に半ばする翁
客裏惜春愁萬斛 客裏 春を惜しみて愁い萬斛
春光負人去匆匆 春光 人に負き去ること匆匆
唯當桃園一日讌 唯だ桃園一日の讌に當たる
故策醉中第一功 故に策す 醉中第一の功

【現代語訳】

富山城の神通川の東、あまたの桃樹の花は春風に焼かれたように赤い。鮮やかなさまは玄都観などものではなく、かの天台の古仙宮かと見まがうほどだ。この良い天気を逃してはならない、名園の中、場所を替えて酒を命じる。清明節の前後にて日は暖かで、霞の中に映し出された桃の花の深き浅き紅色。去年は江東（隅田川東岸）で花を賞でて酔ったが、今年は日本海の北、場所は変わっても興はまた同じだ。花は毎年変わらずに美しいが、私はすでに黒髪と白髪が半ばする爺さんだ。他地での惜春はこの上なく憂いを覚え、春の光は人に背いて慌ただしく去っていく。ただこの桃園の一日の宴に当たり、酔いの第一の功労者である桃花のことを記そう。

【解説】

「水」とは、神通川のこと。岐阜の川上岳を源流とするこの川は、今日も富山の中部を滔々と流れているが、当時の流路は今日とは異なる。当時、神通川は富山城址の北で屈曲して東に流れていた。しばしば氾濫があったことから、明治三十四年から昭和十年ごろにかけて埋め立て工事が行われ、今日のように直進して日本海に流れる神通川^{一九}となり、元の河は松川という細い河として富山城址の側辺にその名残をとどめるだけとなった。「水の東」とは城が置かれていた地域及びその以東を指すと思われる。そこには「玄都観などもものではなく、かの天台の古仙宮かと見まがうほど」の桃が咲いていたという。「玄都観」は、神のいるところとされ、中唐の詩人劉禹錫に「紫陌紅塵拂面來、無人不道看花回、玄都觀裏桃千樹、盡是劉郎去後栽」^{二〇}とあり、桃木が千本も植えられていた地と伝えられる。一方、天台については、李白の「夢游天台山」に、「仙源流水隔凡世、天風吹落桃花紅」^{二一}とあり、やはり桃の花の咲き乱れる地として知られていた。中国の桃花の咲く名勝になぞらえ、富山城中の美しさを述べている。

実際、江戸後期の富山は桃花の咲く地であったのか。いまのところ、江戸時代の富山城下に桃が植えられていたという記述は未見である。ただ、明治十八年頃に記された、竹中邦香著『越中遊覧志』に、「山の直下に八桃林ありて、さながら錦を張るが如し。」とある。

一九 廣瀬誠『越中の文学と風土』（桂書房、一九九八）「富山県と川」四十一頁参照。

二〇 『劉賓客文集』卷二十四・七言五十六首「元和十一年自朗州承召至京戲贈看花諸君子」。

二一 『埼玉大学紀要 教育学部六十二』（二〇一三年）参照。『天台勝跡録』整理の過程でみつかったものらしい。

ここで言う「山」が呉羽山を指すとすれば、その直下に桃林があったのかもしれない。しかし仮にそうだとしても、呉羽は「水之東」ではなく、「水之西」に当たる。もともと、「水之東」には、後に、十代藩主前田利保によって桜が植えられ、桃ならぬ桜の名所となるが、それは、寛齋が富山にいたときから数十年後のこととなる。

この一首は、来越後初めての春の作。美しい桃樹の中で、異郷にいる寂しさは描かれるものの、酒を酌み交わしながら先ずは眼前にある美しい桃の花を「酔中第一功（心地よく酔わせてくれた第一の功労者）」と讃えることに主眼がある。

なお、「客裏惜春愁萬斛」は、宋の廖行之『省齋集』卷二・七言律詩「清江道中」に「客裏春愁萬斛量、隨身抖擻一奚囊」とあり、酷似した表現となっている。

寛政四年、『寛齋先生遺藁』卷一、二七五頁。

② 春日（春の日）

清明節過正芳辰 清明節過ぎて 正に芳辰

北地晴光入望新 北地の晴光 望に入りて新たなり

山雪消残風始暖 山雪消残して 風始めて暖かに

柳梅桃李一時春 柳梅桃李 一時に春

【現代語訳】

清明節を過ぎて正によい季節、北地の晴朗な光の下、眺望は目に新鮮に映る。山の雪も解けてきて、風も暖かになり始め、柳梅桃李の花が一斉に春を迎えた。

【解説】

春日、北陸は雪が解けると様々な花が一斉に咲き出す。雪雲に覆われたどんよりした季節が過ぎ、陽光はまばゆく景色は目に新鮮に映る。本詩には暗い冬が過ぎた後の春到来を喜ぶ気持ちが詠われる。三回目の来越、富山での生活もずいぶん慣れたころの一首である。

「雪消残」は、宋の曾幾に「名山天下少、行矣雪消殘」^{三二}とある。「消残」は、消えてなくなっていくこと。「一時」は、短い時間や飯の時を指すのではなく、「一齐に」の意味。唐の張喬に「東風日邊起、草木一時春、自笑中華路、年年送逐人」^{三三}とある。また、「入望」は、「視野にはいること」をいう。

寛政七年、『寛齋先生遺藁』巻二、二八一頁。

③ 客中看梅

雪峯雲嶂峙城隈 雪峯雲嶂 城隈に峙す

無復條風趁暖回 復た條風の暖を趁いて回る無し

自是梅花似知節 自ずと是れ 梅花の節を知るに似たり

簷水落處一枝開 簷水の落つる處 一枝開く

【現代語訳】

雪と雲に覆われた峰々が城下の際に遠く聳え立っているが、春風はもはや温かさを追い払うことはない。梅は自ずと季節を悟ったように、軒の水（つらら）の落ちるところには一枝の花が咲いている

【解説】

富山城の外堀あたりの家並からは立山連峰が遠くに聳え、四季折々の美しいさまを目にすることができ。まして、春先の雪を戴いた立山は神々しい。遠方に雄々しい立山の姿、目の前には春を察知して花開いた梅の花ひとつ。遠景と近景を見事に詠んだ一首である。「條風」は、立春の頃の東北から吹く春風をいう。

一二二 『茶山集（全八巻）』の巻四「送紹興張耆年教授之永嘉學官」。

一二三 『全唐詩』巻六百三十九「送人及第歸海東」。

寛政七年、『寛齋先生遺藁』巻二、二八一頁。

【夏】

④ 初夏雨景

通邨路與菜花平 邨に通ずる路は 菜花とともに平らかに

竹樹陰森雨欲晴 竹林は陰森として 雨晴れんと欲す

雲淡米家山色變 雲淡くなり 米家の山色は變じ

着蓑人在畫中行 蓑を着た人 畫中に在りて行く

【現代語訳】

村に通じる道は一面の菜の花とともにどこまでも平らかで、竹林はほの暗く、雨が止んで晴れそうだ。雲が薄くなり米芾画の雲煙に包まれた山の様子は変化し、蓑を着けた人がその絵の中を歩いている。

【解説】

北宋の書家であり画家でもある米芾の画風は、「米法山水」、或いは「米家山水」と呼ばれ、雲煙につつまれた山水が多く描かれる。乾隆帝は、「風雨歸舟」の中で「米家山色常如濕、生得溪雲送雨過」^{三四}と記す。米芾の画は常に濡れているように描かれているというのであろう。

どこまでも続く菜の花畑、春の雨も止んで晴れようとしているその時、蓑傘を着た人が通り過ぎて行った。寛齋には、それはまるで

二四 『四庫全書』所収『御製詩集』初集卷二十五・古今體一百四首「風雨歸舟」に「米家山色常如濕、生得溪雲送雨過、為想扁舟迴棹客、蓑衣重比去時多」と見える。

一幅の米芾が描いた絵の中の情景のようにも見えたのかもしれない。

寛政四年、『寛齋先生遺藁』巻一、二七六頁。

⑤ 雨後

梅雨初晴尚裕衣 梅雨初めて晴れるも 尚お裕衣

眠残水郭弄斜暉 眠り残り 水郭に斜暉を弄す

蛙聲起處人閑寂 蛙聲の起こる處 人 閑寂にして

坐待城中買酒帰 坐して待つ 城中にて 酒を買いいて帰るを

【現代語訳】

梅雨が明けたばかりでまだ裕を着たまま、眠りから覚めやらず、水郷に夕陽を愛でる。蛙の声が聞こえる場所は人がまばらで、(わたしは使いの者が)街で酒を買ってくるのを待っている。

【解説】

裕は、裏地をつけて仕立てた着物で、現在では、十月一日から五月三十一日までの間に、着るものとされている。六月になると梅雨に入り、着物は、裏地のない単衣に衣替えしなければならない。しかし、梅雨も明けたのに、寛齋はまだ裕をまとったままだ。「眠残」とは、午睡の途中で目が覚めたことを指すのか。水郷で夕陽を目にし、カエルの鳴き声を耳にしながら、酒を買いに行つた下男を待っているであろう。富山平野に広がる田園の静寂な風景を眺めつつ、城下外れの居宅に座して待つ一人の中老の男性が想像できよう。梅雨上がりの夕焼けを眺める点と衣替えのことを記す点は、陸游詩「今日天氣佳、雨絲弄斜暉、起居惟所適、單複時易衣。」^{二五}の詩境とよく似ている。

二五 『劔南詩稿』卷五十七「四月廿二日微雨中次前輩韻」。

寛政四年、『寛齋先生遺藁』巻一、二七六頁。

⑥ 苦熱（熱さに苦しむ）

萬樹蟬聲破午眠 萬樹に蟬の聲 午眠を破る
風稀客舍暑如煎 風稀にして 客舍 暑きこと煎るが如し
小牖無形消長日 小牖 長日を消すに 形無し
臥讀南華秋水篇 臥して讀む 南華秋水篇

【現代語訳】

木という木はみなセミの声で、昼寝もままならぬ。風もなく、旅の宿（藩校宿舎）は火に煎られているように暑い。小さな窓では日がな一日、過ぎすすべがない。寝転んで『莊子』の秋水篇でも読むとするか。

【解説】

「南華」とは、「南華真經」、すなわち『莊子』のこと。「南華秋水篇」は、『莊子』「外篇第十七 秋水篇」をいう。この編には、「秋水時至」と秋の到来のことが記されている。

「消長日」は、司馬光「春貼子詞・太皇太后閣六首」に「春來無以消長日、閒取經書教小王。」^{二六}とある。司馬光の詩に描かれている季節は旧暦の「春」ではあるが、「日がな一日何もすることがない時には、教授を小王に行おう」と記す。片や、寛齋の「苦熱」詩の季節は夏で、暑すぎてどうしようもない日は「秋の書を読み、涼しさを心で味わおう」と詠う。ユーモアのある一首である。実際、富山の夏は、フェーン現象が発生しやすく、蝉しぐれの夏は本当に暑い。そのことが背景にあるのだろうか。

寛政四年、『寛齋先生遺藁』巻一、二七五頁。

二六 『宋詩紀事』巻十四。

⑦ 夜涼

孤燈涼一味	孤燈	涼 <small>すず</small> やかなること一味
稍覺夜衾清	稍覺 <small>さうかく</small> ゆ	夜衾 <small>ひび</small> の清やかなるを
隔水城鐘遠	水を隔 <small>へ</small> てて	城鐘 遠く
含風市柝輕	風を含 <small>こ</small> みて	市柝 <small>たたく</small> 輕し
虚窗無月影	虚窗 <small>せう</small> に	月影 無く
暗砌有蕉聲	暗砌 <small>せむい</small> に	蕉聲 有り
知是疎疎雨	知る	是れ 疎疎の雨と
前山過五更	前山	五更に過ぐ

【現代語訳】

灯一つ、風がさつと涼しく、夜具も少し冷ややかに感じる。川を隔てて城の鐘が遠くに聞こえ、風の流れの中で拍子木の音も軽やかに耳に響く。がらんとした窓からは月影は見えず、暗い階段の石畳あたりからは芭蕉の葉の音がする。それはまばらに降る雨の音。(目を外に向ければ)前に山が現れ、五更が過ぎた。

【解説】

夏の終わり、灯一つ、月もなく真つ暗な夜、風がさつと吹き涼一味、布団もほんの少しひんやりと感じる。耳に入るのは、川向こうの城の鐘、風に流れる拍子木の音、まばらに降る雨の音。眠れぬまま、時が過ぎたのかもしれない。ふと体を起こして外を見やれば、前方に山がその姿を現した。そこではじめて、五更を過ぎたことを知った。眠れぬまま暗闇の中で聴覚だけが働く。異郷にいる寂しさが背景にはあるのかもしれない。視覚が描き出したのはわずかに開始時の「灯一つ」と末尾の「前山」のみ。研ぎ澄まされた感性による一首と言ってよい。

なお、唐の歐陽詹が、除夜に異郷で過ぐす寂しさを詠った詩「除夜長安客舍」に、「虚牖傳寒柝、孤燈照絶編」^{二七}の句があり、本詩と同様に「虚牖」「孤燈」「寒柝」の語が用いられている。この詩を典故としたと思われる。

又

月過昂畢雨初晴 月 昂畢^{すばるあめかりほし}を過ぎ 雨 初めて晴れ

一味新涼愛夜清 一味の新涼 夜の清きを愛す

蒲扇手中閑事業 蒲扇の手中 閑事業

露叢獨自撲螢行 露叢 獨自 螢を撲ちに行く

【現代語訳】

月がスバル星とアメフリ星を過ぎると、やっと雨が晴れた。さっと涼やかな気が流れ、夜の清々しさが心地よい。蒲の団扇は、もう必要がない。(そこで)露に覆われた叢に、ひとり螢を煽ぎに行く。

【解説】

月がスバル星とアメフリ星を過ぎたころとは、いったい何時頃を指すのだろうか。この詩が、前の詩を受けるとすると、明け方であろうか。そのころやつと雨が止んだ。蒲の葉で作られた団扇^{うちわ}で暑さを凌ごうと思っていたが、涼やかな風がひたすらに吹くので、その団扇も用なしだ。ままよ、露に覆われた草の中に螢をもとめ、飛び来る螢と戯れるのにこの団扇を用いよう。そんな気持ちを詠うユーモアのある一種である。

なお、「一味」の二字は、「夜涼」二首に共通して用いられる。炎暑の夏が終わろうとし、待ちに待ったさっと過った涼しさをあらわ

していよう。陸游「連日作雨苦熱」に「羽扇綸巾一味涼」^{三八}とあり、本詩と類似の表現が見える。
寛政三年、『寛齋先生遺藁』巻一、二七三頁。

【秋】

⑧ 秋晚閑歩（秋の暮 そぞろに歩く）

清秋郊野路 清秋 郊野の路
躰適木綿衣 躰は 適す 木綿の衣
逐景詩思乱 景を逐い 詩思乱れ
迎風酒力微 風を迎えて 酒力微かなり
水枯魚已瘦 水 枯れ 魚 已に瘦せ
葉少果初肥 葉 少なくて 果 初めて肥ゆ
老健憑筇竹 老いて健やかに 筇竹に憑り
長歌歩月帰 長歌して 月に歩みて帰る

【現代語訳】

季節は秋の盛り、郊外の野の道、木綿の衣がちょうどよい。目にする景色のままにあれこれ詩作に耽る。風に吹かれて酒も冷めた。水は枯れ魚も痩せて、葉はまばらで果実も実ったばかり。老いてなお元気な私は、杖を頼りに、朗々とうたいながら月に向かって帰る。

【解説】

越中の秋はそう長くはない。だからこそ、空と空気が澄んだ清秋の終わりがころはなおさら心地よく感じる。その時期の気温はまさにちょうどよく木綿の服がふさわしい。美しい景色を追いあれこれ思索に耽れば、清々しい風に酔いも薄れた。老いたもののまだ健康だ。杖を突きながらも、秋の月に向かって詩を吟じながら帰るのがとりわけ心地よい、そんな思いを歌った一首である。身に着ける着物で季節感を表すのは、前掲⑤「雨後」詩と同じ。

寛政三年、『寛齋先生遺藁』巻一、二七三頁。

⑨ 客去

客去空齋夜二更 客去りて 空齋の夜二更

瓶茶再汲石泉烹 瓶茶 再び石泉を汲み烹る

月沈漏少人初定 月 沈み、漏 少くして 人 初めて定まる

秋静吟蛩四面聲 秋静かに 吟蛩 四面の聲

【現代語訳】

客が去ったがらんとした書齋は夜も更けた二更の時、一瓶の茶を再び石の間から湧き出る水を汲んで烹る。月沈み、漏刻（水時計の滴音）も少なくなり、人も寝静まった静謐な秋、コオロギの鳴く音が四方から聞こえる。

【解説】

「人定」は人が寝静まる時をいい、「亥時」を指すとされるが、今日の二十一時から二十三時の頃をいう。月も姿を隠し、真っ暗で静寂な中で水を汲み湯を沸かす。コオロギだけが静謐な闇夜に響くのだ。「月沈漏少人初定」は、蘇軾「卜算子」（黃州定慧院寓居作）の

「缺月挂疏桐、漏斷人初靜（欠けた月が掛かる まばらな桐の上水時計の滴も絶え 人のざわめきも静まった）」^{二九}の句が念頭にあったと思われる。

寛政三年、『寛齋先生遺藁』巻一、二七三頁。

⑩ 溪行

高低谿路仄

高低の谿路 仄かにて

停杖立巉巖

杖を停めて 巉巖さんがんに立つ

木落邨全出

木落ちて 邨 全出し

日残山半銜

日残かけ 山半ば銜つらなり

欲帰雲漠漠

帰らんと欲する雲は 漠漠たりて

将宿鳥喃喃

将に宿らんする鳥は 喃喃たり

秋景耽幽淡

秋景 幽淡に耽け

愈知世味鹹

愈いよいよ世味の鹹しんさを知る

【現代語訳】

上下する谷間の道が狭くなり、杖を止めて高く切り立つ岩の上に立つと、視界からは、木の葉が落ちた隙間に、村の全貌が現れ、日は沈みかけて山はその境界があいまいになっている。帰ろうとする雲がはるかに広がり、宿ろうとする鳥がさえずる。秋の景色は美しくも物寂しく、ますます世の鹹さを知る。

二九 『四庫全書』『東坡詞』一卷（全一卷）に「卜算子」に「缺月挂疏桐、漏斷人初靜」と見える。

【解説】

「谷間の道が狭くなり、杖を止めて高く切り立つ岩」があるのは、神通川沿いに違いない。秋も深まり、葉が落ちると、今まで目できなかつたものが急に現れることがある。それを寛齋は、「木落邨全出」と記す。これは、陸游詩にも「木落山尽出」^{三〇}とあり、それにヒントを得たものと思われる。「木落」とは、木の葉が凋落すること。続く「日残山半衡」は、白楽天に「城昏日半衡」^{三一}とあり、「街全体が暗くなり日の光も繋がって混然とした」という意味、その判別できないさまを形容しようと「半衡」を用いたのであろう。美しい秋景を眼前にしつつも物悲しい北陸の晩秋と自身の境遇が重なっているように思える。

寛政三年、「寛齋先生遺藁」巻一、二七三頁。

⑪ 客夜偶作

越中九月初寒 越中 九月の夜 初めての寒さ
偏覺孤眠一室寛 偏えに覺ゆ 孤眠 一室の寛きを
山雪晴来添髣白 山雪 晴れ来たりて 髣白に添い
林霜深處奈心丹 林霜の深處 心丹をいかせん
身癩雨氣侵何耐 身 癩せて 雨氣 侵すに 何ぞ耐えん
衣薄風威忍亦難 衣 薄くして 風 威しく 忍も亦た難し
郷夢路長帰不得 郷の夢路は長くして 帰るを得ず
家書重又挑燈看 家書は 重ねて又た 燈を挑げて看る

三〇 『劍南詩稿』卷三十七「小舟過吉澤効王右丞」に「澤園霜露晚，孤村煙火微，本去官道遠，自然人迹稀，木落山盡出，鐘鳴僧獨歸，漁家間似我，未夕閉柴扉」と見える。

三一 七十一卷本『白氏長慶集』卷二十四「奉和汴州令狐令公二十二韻」に「門靜塵初斂，城昏日半衡」と見える。

【現代語訳】

越中では旧暦九月に夜は寒くはじめ、独り寝する部屋が広いとひたすら感じる。山の白雪が日に映えて、鬢の白さを更に目立たせ、林の霜の奥深いところでは心をいかんともしがたい。身は痩せて雨の湿気に耐えられず、衣は薄く風の激しさに持ちこたえられそうもない。故郷の夢を見ても遠くにあつて帰ることがかなわず、家族からの手紙を何度も何度も燈火をかきたてて読む。

【解説】

唐の権徳輿の詩に遠方の愛する人に思いを馳せて眠れないさまを「転枕挑灯（枕を何度もひっくり返し、灯をかかかって夜が明けるのを待つ）」^{三三}と形容した一句がある。気温が低がると心も寒くなり家族への思いが一層募るもの。本詩は、初頭の寒さに募る望郷の念を詠った一首。「雨氣（雨の気配）」の語は、李煜「病中感懷」にも、「風威侵病骨、雨氣咽愁腸。」^{三三}と類似の表現がある。「心丹」は「丹心」に同じで脚韻のために倒置したもの。

寛政三年、『寛齋先生遺藁』巻一、二七三頁。

【冬】

⑫ 冬夜

膽瓶汲水月中還 膽瓶にて水を汲み 月中に還る
手置風爐煮夜閑 手もて風爐を置き 夜の閑けさに煮る
却聽溪邊碎水處 却つて聽く 溪邊の水を碎く處

三三二 『全唐詩』卷三二九権徳輿「太常寺宿齋有寄」に「転枕挑灯候曉鷄，相君応嘆太常妻」と見える。
三三三 『南唐二主詞』に南唐李煜「病中感懷」「憔悴年来甚，蕭条益自傷。風威侵病骨，雨氣咽愁腸。」と見える。

寒聲激石更潺湲　寒聲　石に激して更に潺湲せんかん

【現代語訳】

徳利状の瓶で水を汲み、月の中を家に急ぐ。風炉（湯をわかすために用いられる釜）を手で置いて、夜更けの静かな中でお湯を沸かす。（その音に耳を澄ますと）溪流の水が砕けるように思え、冬の風の音が石にぶつかり溪流がよりさらさらと流れるように聞こえる。

【解説】

住居のほど近いところに、清水の湧き出る場所があったのか、そこで水を汲み、お湯を沸かす。耳をすませば、しんとした夜に湯の沸く音は、水の流れる音、風が石にぶつかる音のように聞こえる。冬の寒さの中で、研ぎ澄まされた聴覚が詠んだ一首といえる。

寛政三年、『寛齋先生遺藁』巻一、二七三頁。

⑬ 晨起

紙被風寒數曉鐘　紙被　風寒く　曉鐘を數う

夜來飛雪把階封　夜來の飛雪　階を把りて封ず

瓶中欲折梅花挿　瓶中　梅花を折りて挿さんと欲す

也恐牆邊屐印蹤　也ま恐る　牆邊に　屐蹤を印するを

【現代語訳】

紙で作った夜着は風が吹くと寒く、（目が覚めて）曉の鐘を数える。昨夜来、雪が舞い階を覆いつくした。梅の花を手折り花瓶に生けようと思うが、垣根のあたりに下駄の跡が残るのではと思う。

【解説】

「紙被」とは、『日本国語大辞典 第二版』^{三四}に「〔かみふすまとも〕紙子^{かみこ}で作った粗末な夜具。紙の間にわらしべを入れることもある。紙のふすま。かみぶとん。天徳寺。」とある。雪の降る早朝の寒さが、「紙被」でさらに寒く感じる。ましてや「飛雪」が外の階を覆っているのだからなおさらであろう。早咲きの梅を一枝取ってきたと思うが、足跡がついて誰かに知られるのが嫌なようである。「屐蹤」は、江戸の俳句「雪の朝の字二の字の下駄の跡」とあるように、二の字である。寒さで目を覚ましたものの、布団の中で外の様子をあれこれ思つて詠んだ一首か。

寛政三年、『寛齋先生遺藁』巻一、二七四頁。

⑭ 雪中雜詩五首

其の一

壓屋埋門雪過顛 屋を圧し門を埋めて 雪は顛^{いただき}を過ぐ

玉山始有五丁穿 玉山 始めて五丁の穿つ有り

如絲逕路通来往 糸の如き逕路 来往を通じ

不使行人爭後先 行人をして 後先を争わ使めず

【現代語訳】

家を覆つて玄関を埋めた雪は頭のとつぺんを越えるほど降つた。幾人かの男手で雪の山はやつと穿たれて、糸のような小道が往来を可能にし、道行く人が先を競うこともない。

【解説】

富山の雪の様子を詠ったもの。東晋の地方誌『華陽國志』卷三に、秦惠王は蜀王が好色であることを知り、五人の娘を蜀に送ることを約束したため、蜀王は五丁を派遣して山を開かせて迎えたところある。五丁は山を開くほどの力持ちであるという。「玉山始有五丁穿」はその故事が背景にある。「玉山」は、「雪が堆積しているさま」を指す。「如絲逕路」を、高田などに見える「雁木」と解する向きもあるが、富山城下の街並みには「雁木」があったという記述は管見のところ見当たらない。なお、今日の富山市は、家を覆うような降雪はほとんどない。

其の二

欲跨小蹇命吟行 小蹇を跨ぎ 吟行を命ぜんと欲す
埋盡寒郊路不平 埋め尽す 寒郊の路 平らならず
雲黒西山風倏變 雲黒く 西山 風倏ち変じ
前邨簸雪後邨晴 前邨は雪を簸り 後邨は晴る

【現代語訳】

小さなロバに跨いで吟行しようとしたら、雪が寒村を埋め尽くして道はでこぼこだ。雲は黒くなり西山の風は急に変わり、前の村は雪が勢いよく降っていたが後の村は晴れていた。

【解説】

「跨小蹇」は、陸游詩によく登場する語彙。例えば、陸游「秋夜感遇十首以孤村一犬吠残月幾人行為韻・其の四」に「我夢遊異境、烏帽跨小蹇」^{三五}などとある、「跨小蹇」には詩人が吟行に出かける姿が託されている。江戸時代の富山にロバはなかったであろうから、

三五 『劔南詩稿』卷五十八。

本詩は、陸游詩に託された詩人のイメージを借用したのである。富山の天気は変わりやすく、冬においてはなおさら激しく変化する。今日にも通じる自然の様子が描写されている。

其三

西山一帯玉龍盤 西山一帯 玉龍 盤わたがまる
 河水湛藍月裏寒 河水 藍を湛たえて 月裏 寒し
 可惜城中三萬戸 惜しむ可し 城中三萬の戸
 無人會得把盃看 人の 盃を把りて看るを會得する無し

【現代語訳】

西山一帯は玉龍が蟠るようで、また、川の水は藍色を湛えて月光の中で寒々と輝いている。しかし、残念なことに、城中三万戸の人々には酒杯を取って鑑賞できる人はいない。

【解説】

「西山一帯」とは、今の富山県砺波のあたりか、そこからは江戸期には美しい瑪瑙などが産出された。一方、富山城下の「河水」も、寒い月の夜には藍色を湛えてまばゆく輝く。これが富山の冬の美しさの一つということであろう。しかし、寛齋は、それを解する人がこの地にはいないと嘆く。確かに、寛齋自身は、玩具傲具の趣味もあり、「傲具詩」や「瑪瑙研山」などの詩も残っていて、その目から見れば越中の人々の中にはそのことを真に解する人はいないように見えたのだろう。

ただ、加賀藩ではあるが、高岡に、「寛政年間より文政の初年に至るまで、地方の人士皆仰いで以て文壇の盟主」寺崎蛸洲がいて、その『蛸洲餘珠』^{三六}「五萬度山」一文には、砺波から「瑪瑙」などの玉石が産出されていたことが漢文で記されている。また、『高岡史料』^{三七}には、

三六 磯部祐子・森賀一恵著『富山文学の黎明(一)漢文小説『蛸洲餘珠卷下』を読む』(桂書房、二〇一七年)九十六頁。
 三七 高岡市役所編、明治四十二年刊。七九四、七九五頁。

寺崎崎洲の妻の父、即ち岳父・内藤彦助（医者）が「玉石刀剣」を好んでいたことなどが記され、当時、一部の経済的に裕福な人々の間で、玉石ブームがあったことが窺える。

其の四

破臆寒徹五更風 破臆 寒は徹す 五更の風

八尺身材曲似弓 八尺の身材 曲げて弓に似る

氷柱幾條垂到地 氷柱幾條 垂れて地に到る

水晶簾外月玲瓏 水晶簾外 月 玲瓏

【現代語訳】

破れた窓から吹き込み、寒さが身に沁みる。明け方五更の風に、八尺のこの身は縮こまり弓のようだ。氷柱が何本も垂れて地に届いている。その氷柱は恰も水晶の暖簾のようで、その外には、月が玲瓏と輝いている。

【解説】

冬の月の下で冷たい光を放つ氷柱がその厳しい寒さを伝える一首である。宋の呂濱老に「涼露洗秋空。菊径鸣蛩。水晶簾外月玲瓏」^{三八}の句がある。片や秋の夜空、片や冬の夜空の情景と季節は異なるが、「水晶簾外月玲瓏」一句が両者に共通して用いられている。

其の五

密雪沈沈夜欲中 密雪 沈沈として 夜は中ばにならんと欲す

擦簷聲淡聽還空 簷^{のき}を擦^する声は淡く 聴^まきて還た空し

三八 『聖求詞』卷一「浪淘沙・涼露洗秋空」。

長松能慣低垂態 長松 能く低垂の態に慣れて
摧落瑤花不待風 瑤花を摧落するに 風を待たず

【現代語訳】

細かい雪は静かに降りしきり、そろそろ真夜中になろうとする。簷をかすめる音は、微小で聞こうとしても消えてゆく。長い松も低く垂れる格好に慣れて、雪を落とすのに風を待つまでもない。

【解説】

静かな夜に、細かい雪がしんしんと降る。耳をすませば、雪が簷を擦る音がかすかに聞こえそうだが、その音は雪の中に消えていった。背の高い松も雪の重みで首を垂れ、雪はその垂れた松に従い地面へと落ちていく。富山に来て初めての冬であるが、その細かな観察眼に驚く。

「瑤花」は、白玉の花、また雪を指す。「密雪」は、謝惠連「雪賦」に「俄而微霰零、密雪下」^{三九}とあり、細かい雪を指す。寛政三年、『寛齋先生遺藁』巻一、二七四頁。(なお、其の一と其の四は、『江戸詩人選集五 市河寛齋・大窪詩仏』に已に訳出されている。)

⑮ 冬晴

冬郊景物属晴暄 冬郊の景物 晴暄に属し
霜薄秋光一半存 霜薄くして 秋光一半存す
可惜山僧不解事 惜しむ可し 山僧 事を解さざるを
満溪風葉拂黄昏 満溪の風葉 黄昏を拂う

三九 『全宋文』卷三十四。

【現代語訳】

(今日の) 冬の郊外の景色は晴朗で暖かいといってよく、霜もわずかで秋の光が半ば残っている。ただ残念なことに田舎の僧侶は風流を解さない。溪谷を覆う紅葉が風に舞い黄昏(の寂しさ)を払っているのに。

【解説】

北陸の冬は、晴れる日などそう多くはない。そのためか、晴れると殊のほか嬉しく、太陽の下で、冬でも秋の輝きと温かさを取り戻したように感じる。そんな日、足を運んで目にした溪流は美しく、その兩岸の紅葉は錦織りなし、風が吹けば溪谷に舞う。しかし、見慣れた山僧はその風景を前にしても心躍ることがないように見えた。そのような中で詠んだ一首であろう。前掲「雪中雑詩」三首目に見える、風流を解さぬ「城中三萬の戸」といい、「山僧」といい、寛齋の眼には、風流を解さない田舎の人々に対する無意識の蔑みもあつたようである。

なお、「暄暖」はあまり耳慣れない言葉であるが、冬に遭遇した春のような暖かさを表現する一語であり、陸游詩「冬晴」に「歳暮常年雪正豪、今年暄暖減絺袍」^{四〇}と見える。

寛政七年、『寛齋先生遺藁』卷二、二八二頁。

⑩ 客舎冬暁

重裘暖帽圍爐坐 重裘暖帽 爐を圍みて坐る
十月江城無此寒 十月の江城 此の寒さ無し
昨夜雨聲添米粒 昨夜 雨聲に米粒が添い
満山朝色雪中看 満山の朝色 雪中に看る

四〇 『劔南詩藁』卷六十九。

【現代語訳】

重ね裘を着て暖かい帽子を被り爐を囲んで座る。十月の江戸にはこんな寒さはない。昨夜は雨音に米粒が落ちるような音が混じっていたが、今朝は山という山の姿が雪の中にあつた。

【解説】

その土地が余りに寒いと、かつて過ごしたところはこんなに寒くなかつたのにと愚痴りたくもなるだろう。天氣の移り変わりも早く、暗くなる頃は雨だったのに霰交じりとなり、起きてみたら一面の雪だ。今でも体験する変化の激しい富山の天氣が詠われている。

「重ね暖帽」は、白居易「即事重題」^四に「重ね暖帽寛毡履、小閣低窗深地爐。身穩心安眠未起、西京朝士得知無。」とあり、「重ね暖帽」とあるように、冬に身に着ける帽子の表現として用いられる。

寛政七年、『寛齋先生遺藁』巻二、二八二頁。

小論は、令和四年度科学研究費補助金基盤研究（C）「江戸明治期漢文笑話集の訳読と研究―江戸後期から明治初期の漢文笑話集を中心に―」（研究課題番号18k00313、代表・磯部祐子）の研究成果の一部である。